

研修報告書 No 44

研修施設：佐川町立高北国保病院

四万十町立国保十和診療所

昭和大学藤が丘病院 渡辺大士研修医

今回私は高知県佐川町立高北国民健康保険病院に一ヶ月研修させて頂きました。病棟実習では、副院長の浦口武男先生の下で勉強させて頂きました。地域病院では科に分かれておらず、一人の医師が心不全、肺炎、脳梗塞と様々な病態の患者を受け持っていました。このことも驚きましたが、更に驚いたことは患者さんが皆 70~90 歳と高齢であったことです。これが地域医療における重要なポイントだと思いました。高齢者の方の場合、病気が治ったとしても退院が一筋縄では行きません。患者さん自身がどれくらい動けるのか、家族と一緒に住んでいるのか、ヘルパーをつけるのか、など課題がたくさんあります。家族、ソーシャルワーカー、継続看護師と話し合いをしてどこをゴールとするのかを決めていく必要があります。浦口先生は、老後を家で暮らすことを目標とする「ずっとここで暮らす応援団」の団長を務められており、「在宅医療研修会」という勉強会で浦口先生の講演を聴かせて頂きました。研修には様々な職種の方々が参加されており、高齢者の方々がどのようにして望む場所で暮らしたいかを叶えて行くのかをみんなで考えようというものでした。そのためにはたくさんの人の協力が必要であり、様々な制度や、援助方法を考えて支えて行きましょうということでした。帰りの車の中で先生の仰った一言が深く心に感じました。「大学病院でいう病気を治すというのは Cure です。でもこのような地域の病院で一番大切なのは Care です。病気だけじゃなく、患者さんの生活までしっかりみてあげることが重要なのです。」この言葉に「医療とはなにか？」の答えを感じる事ができました。どちらも大切なことです。でもこれは都内の大学病院では知ることのない、人間が生き、老いて死んでいく、生活の中でしか知ることのできない人間の尊厳の問題なのだと思います。

また3日間と短い期間でしたが、四万十町立国民健康保険十和診療所にて研修させて頂きました。常勤の先生が二人おり、入院設備がないため外来診療と訪問診療がメインでした。所長の門田直樹先生が仰っていたことで「僕達ができることは患者さんを脳梗塞で寝たきりにしないようにすることです。もし寝たきりになってしまったら往診診療か、老人ホームなどの施設に入所するしかないのです。」という言葉が強く心に残りました。どこでどうやって過ごすのは自分で決めたいのに、病気のせいで生活が送れないのはとても辛いことです。高齢者ばかりの人口の少ない患者さんたちの体調管理を行なっていくのも、地域医療独特のものだと思います。山間部の生活には不便な環境で、高齢者の生活を支えていくにはチームで一人の高齢者を見ていくことが必要になります。医師は健康管理、ヘルパー、ソーシャルワーカー等が生活を管理していく、何かがあれば隣人が気がつく等、地域ぐるみ力が合わせる事が大切です。しかし様々な問題が有り、改善していく必要がありますが、どれも難しい問題です。

その一つの医師不足について、第26回高知県地域医療学会に参加させて頂きました。高知県では医師を集めるための対策として、学生の時の実習について地域に出て学ん

でゆくという実習が行われていました。早いうちから地域医療を知ることで、今後どのような仕事をしていくのかという医師像を示すことは、とても重要なことだと思いました。

今回の研修は大学病院では決して学ぶことができない、高知県にしかない大変貴重な経験でした。医療とは病気を治すためにあるのではなく、患者さんのためにあるのだということを実感しました。幼少時「人の役に立ちたい」と思い医師を志し、そのような医師の像をこの研修で新たに学びました。地域医療実習に高知を選んで本当に良かったです。これからは気持ちを新たに頑張っていきます。